

一京極宮諸大夫尾崎大和守説云、昔遠所行幸ノ時杓ヲ持サレ候事有之、年中行事繪卷物ニモ杓
ニ手巾付シ體見エタリ、是ハ畢竟御手水ニ用ラレシ物也、

〔女用訓蒙圖彙〕手水かけまいらす事

御手拭をばあふぎにすへて持參る也、略又水繼に水にても湯にても入まいらすときはた
らいの中にをきて、其上に御手拭をたゝみて置べし、手拭はかたにかけて、手水をかくべし、かけ
はて、肩をよせ候へば、手拭をとり給ふ也、

〔譚話浮世風呂前編上〕御免なさい、田舎者はめりやす好の江戸子にて、ざつと一風呂、手巾を濡ら
すのみ也、

〔譚話浮世風呂三編上〕エヘン 浮世風呂の風呂の中に、女の數が五人六人七人ちかく居はべり
て、略中エヘン 玄やべり侍りて、又後にはたがひに湯をあびみあびずみ、かけみかけずみ、略中く

るひはべりしが、その湯がエヘン 其湯がはね侍りければ、そこにかみさんはら立はべり、がつ點
せぬとて四の五の侍りけるを、やうくになだめ侍りて、百万年の御いはひといはひ侍るッ、ば
んとうよしか子、そこで歌に、 錢金は涌出る湯屋の手ぬぐひで年のかしらをふくは來にけり
〔諸艶大鑑四〕忍び川は手洗が越

内儀も手拭あられに大豆などいりませし菓子袋のはなむけ、心ざし有、下女ども、思ひくゝに
御あかしをことづてける、

〔世間姑氣質〕姑が寺參りを待て居る嫁が樂みは、生藥の櫃の中、召遣ひの丁稚まで舌うちする
二日目のよい加減、

夫の留守なれば、常よりも見世戸立の玄まりに念を入れ、四つ時より家内夜さとうふじけるが、
略中 黒装束に、大小きめし大男が五人ながらぬきみひつさげ、丁稚は前後もえらす寝入居る故、